

自閉症スペクトラム障害の親支援にかかわる
要因の探索的研究

——間主観性、愛着、育児不安、障害受容に焦点をあてて——

尾 崎 康 子

自閉症スペクトラム障害の親支援にかかわる 要因の探索的研究

——間主観性、愛着、育児不安、障害受容に焦点をあてて——

尾 崎 康 子

A Exploratory Study of Factors Related to Support Program for Parents who Have Preschool Children with Autism Spectrum Disorder:

Focusing on Intersubjectivity, Attachment,
Parenting Anxiety and Acceptance of Disability

OZAKI Yasuko

This study focuses on attachment and intersubjectivity which are the components of parent-child relationship as well as parenting anxiety and acceptance disability of parents associated with parental support. Investigating the connection between them, the work aims to do exploratory research of the positive factors to support parents of preschool children with autism spectrum disorder(ASD). Questionnaire surveys were carried out to ask mothers of children with ASD (N=56) and those of typically developing children (N=254). They were composed of the items of attachment, intersubjectivity, acceptance of disability, parenting anxiety, affinity and autonomy. As the result of covariance structure analysis of these items for the mothers of children with ASD, the affinity affected the intersubjectivity, and further the intersubjectivity affected the acceptance of disability. It was supposed that the sympathetic and active social interaction which the mothers of children with ASD performed, increased the intersubjectivity and improved the acceptance of disability.

Key Words : preschool children with autism spectrum disorder, support system for parents,
social interaction, intersubjectivity, attachment

問題と目的

近年、自閉症スペクトラム障害（Autism Spectrum Disorder: 以下、ASDとする）の親支援の必要性が国内外の研究によって指摘されている。ASD児は、社会的コミュニケーションに問題を持ち、他者との関係性を築くことが難しく、さらにこだわりや感覚の特異性を持っている。これらのASDの発達特性は、定型発達と大きく異なるため、親でも我が子の行動や気持ちが分かりづらく、子どもへの適切な対応が難しい。そのため、親は日常的に強い育児不安や育児ストレスを持っていると言われている（Lee, Harrington, Louie, & Newshaffer, 2008; 坂口・別府, 2007）。また、障害児の親の問題として障害受容がある。親が我が子の障害を受け止めることができない場合は、親のQOLにネガティブに作用するため、障害受容は、親の状態を把握するのに重要な要因である。このように、ASD児の親は多くの問題を抱えており、これまで、ASD児の親支援として、育児不安や障害受容などの親の心理的側面に対して直接働きかける支援が行われてきた。しかし、ASD児の理解とその対応の難しさが親の重い心理的負担になっているならば（柳澤, 2012）、親が子どもの発達特性に応じた対応ができるように支援することが望まれる。

近年、ASD児の発達の介入を行う親支援として、SCERTSの交流型支援（Prizant, Wetherby, Rubin, Laurent, & Rydell, 2006）や More Than Words（Sussman, 2012）が提案されている。これらのプログラムでは、親が社会的相互作用を促す方法を学び、日常生活の中で親子の社会的相互作用を能動的に行うことを目指している。これらが注目されるようになった背景には、ASDの中核障害として社会的認知発達の遅れや偏りが指摘されるようになり（大井, 2006）、さらには、社会的認知発達における発達早期からの社会的相互作用の重要性が明らかになったことがある。従来、ASD児の社会的相互作用を促す親支援の効果は、子どもの共同注意などの社会的認知を指標にして検討されてきたが（Carter, Messinger, Stone, Celimli, Nahmias, & Yoder, 2011; Girolametto, Sussman, & Weitzman, 2007）、ASD児の親支援の有用性を調べるためには、発達早期からの社会的相互作用のプロセスにおいて生じる親子の関係性の検討が欠かせない。ASD児の関係性については、ASD児が生後の相互作用において形成される関係性の障害を有していると捉え、関係性を

促す発達支援が行われているが（小林・鯨岡, 2005）、さらに、愛着対象の成立や他者との共感関係の成立がASD児の発達を促すことを踏まえて、愛着と間主観性の観点からASD児の関係性を高める支援を捉える重要性が指摘されている（榊原, 2011）。親子の相互作用を重ねる中で進展していく関係性発達において、発達早期の親との間に限定して形成される絆が愛着であり、そして、親子の相互作用の中で生じるのが間主観性と言えよう。

これまでASD児は愛着に障害を持っていると考えられてきたが、近年、接近維持行動によって愛着を評価する実証的研究から、ASD児でも親への愛着行動が生じていることが明らかになった（Capps, Sigman, & Mundy, 1994; 尾崎, 2005）。しかし、ASD児の愛着の問題は、接近維持行動の量的差異ではなく、他者とのやりとりの質にあることが指摘され（Buitelaar, 1995）、縦断的研究からも、ASD児では愛着行動の確立が遅れ、愛着の質が少し異なることが報告されている（白滝・柏木・松川, 1996）。定型発達児では、乳児期に親を心理的安全基地とする愛着が形成され、その後、内的作業モデルという表象レベルの愛着関係を成立させるが、ASD児では、親への接近維持行動は、自分の要求を最もよく満たしてくれる「道具的安全基地」として親に関係を求めている可能性が考えられ（伊藤, 1995）、さらに、その後の内的作業モデルの成立に困難を持っていると言われている（Sigman, DiJamco, Gratier, & Rozga, 2004）。これらは、ASD児の愛着が、行動レベルよりもむしろ表象レベルにおいて、定型発達の愛着形成と異なっていることを示すものであり、ASD児の愛着を検討する際には、行動レベルと表象レベルを分けて考えていく必要がある。

このことは、間主観性の観点からも指摘されている。定型発達では、生後早い時期から親子の相互交流を重ねるプロセスにおいて間主観性が生じ（Trevvarthen, 1998）、その間主観的経験を基礎として愛着表象である内的作業が形成される（Rogers, Ozonoff, & Maslin-Cole, 1991）。しかし、ASD児では、間主観性が生じにくいと言われており（Trevvarthen, Aitken, Papoude, & Robarts, 1998）、それが内的作業モデルの未形成に繋がることが考えられる。間主観性は、二者関係において互いに相手の主観的なもの、すなわち相手の意図や気持ちが分かることであり、当然、親子交流において親にも間主観性が生じている。間主観性に問題を持つASD児との相互作用において、親が子どもの気持ちや意図をどのよう

に間主観的に把握しているかは、親子の関係性を捉える上で重要な問題であると言える。

本研究では、ASD児の親子の関係性として、子どもの愛着行動と親の間主観的把握に注目した。ASD児は、接近維持する愛着行動を示すが、その際に間主観性が生じないことが指摘されている。これを親の観点から捉えようと、子どもが自分に近づいてくるが、気持ちが分かりあえないために、子どもをしっかりと受容できない状態ではないかと推察される。このようなASD児との関係性を築くには、親側からASD児の気持ちに寄り添った共感的働きかけが必要であると指摘されているように（石井, 1995, 小林・鯨岡, 2005）、親子の相互作用に対して、自律した主体として共感性を持つという親側の心性が大きくかかわっていると考えられる。また、これらの心性は親意識に影響を及ぼすため（Grossmann, Pollack, & Golding, 1988）、育児不安や障害受容など親の心理的要因との関係を含めた検討が求められる。これまで親の相互作用を促す親支援を検討する際には、子どもの要因を指標にするにとどまり、親側の要因から調べた研究は行われていない。そこで、本研究では、これらの親子の関係性や親の内的要因の視点から、ASD児の親支援の有用性に関わる要因を探索的に検討する。また、ASD児の母親が持っている支援ニーズの観点からも親への支援のあり方を考えていく。

方 法

1. 調査手続き

A県の幼稚園、保育所、療育施設に在籍する自閉症スペクトラム障害あるいはその疑いと診断された幼児の母親に対して、調査の主旨と個人情報保護について説明した上で、調査協力を依頼した。調査の回答は、無記名で郵送により回収した。一方、統制群として、A県の幼稚園に在籍する母親に調査を依頼した。調査用紙は幼稚園から配布し、糊付けの封筒に入れられた無記名の回答用紙を、幼稚園で回収してもらった。回収率は、97.2%であった。フェイス項目として、「子どもの発達が気になるか」を尋ね、「気になる」と回答した21名と回答に不備があった2名を除いた254名を対象とした。

2012年3月～9月に調査を実施した。この時期には、DSM-IV-TRに準じて、アスペルガー症候群、高機能自閉症、自閉症、広汎性発達障害の診断名が用いられていたが、本研究では、これらを含めて、

自閉症スペクトラム障害（ASD）として記載する。

2. 調査対象

本研究の対象者は、ASDあるいはその疑いと診断された幼児の母親56名（以下、ASD群）と定型発達児の母親254名（以下、定型発達群）である。幼児の性別は、ASD児は、男児50名、女児6名、定型発達児は、男児105名、女児149名である。幼児の平均月齢（標準偏差）は、ASD児が53.9か月（14.4か月）、定型発達児が54.8か月（11.0か月）であり、母親の平均年齢（標準偏差）は、ASD児の母親が38.7歳（3.6歳）、定型発達児の母親が37.6歳（4.1歳）である。

3. 調査内容

以下の項目について、いずれも4件法で母親に尋ねた。

支援ニーズ：Family Needs Survey日本語版（呉・岡田・朴・中嶋, 2005）の10項目と自閉症幼児の母親への聞き取り調査をもとに作成した9項目、計19項目を4つの支援ニーズに分類した。心理的支援ニーズは「心理カウンセラーに相談したい」、「子どもへのかかわり方を指導してもらいたい」など5項目（ $\alpha=.846$ ）、情報支援ニーズは「子どもの育て方に関する情報が知りたい」など3項目（ $\alpha=.884$ ）、レスパイト支援ニーズは「自分自身のための時間をもっとほしい」、「家族の中にゆっくり会話できる人がほしい」など5項目（ $\alpha=.760$ ）であった。障害支援ニーズは、「子どもの障害についての情報が知りたい」、「先生や訓練担当の専門家ともっと話す時間がほしい」など6項目（ $\alpha=.709$ ）で、これについてはASD群だけに尋ねた。

障害受容：我が国では、障害受容の概念は統一されていないが、北原（1995）が述べている「親の（発達）障害児の受容とは、障害をもった子どもを、自分の子どもとしてあるがままに受け入れ、育児を楽しみながら、障害に応じて適切に育てることを受け入れることである」の定義のもとに、障害受容の項目を選出した。尾崎・齋藤・Toth（2011）の「子育ての受容」尺度から7項目、三木（1998）の「ふっきれ感」尺度から5項目を採用した。さらに、夏堀（2001）の障害受容過程で生起する情緒的・認知的側面と行動的側面に関する項目を参考に8項目を作成した。

愛着行動と間主観的把握：愛着行動に関しては、近藤（1998）の愛着Qソート法日本語版42項目の内、

「家で遊んでいる時、私がいる場所を絶えず注意して、私が移動すると気がつく」、「私から離れて遊びにいき、また私の方へ戻って、近くで遊ぶといったことを繰り返す」など、母親を安全基地として利用することを示す5項目を愛着行動尺度 ($\alpha=.764$) として用いた。得点が高いほど愛着安定性が高いことを表している。これらの項目について、子どもが現在あるいは以前にふるまったことがあるかを母親に尋ねた。親の間主観的把握に関しては、尾崎ら (2011) の親意識の尺度から「子どもと気持ちがとても通い合っていると感じる」、「私は子どもが今どのような気持ちでいるか大体わかると思う」など3項目に加えて、坂口・別府 (2007) の愛着困難尺度から5項目を用い、間主観的把握尺度 ($\alpha=.799$) とした。

育児不安：牧野 (1985) から、「毎日、くたくたに疲れる」、「考えごとがおっくうで嫌になる」、「子どものことがわずらわしくてイライラする」など8項目を採用し、育児不安尺度 ($\alpha=.803$) とした。

親和性と自律性：Grossmann, Pollack, & Golding

(1988) は、親意識に影響を及ぼす要因として親和性と自律性に注目し、親として親和性と自律性をバランスよくもっていることが重要であると述べている。親和性は、人の面倒を見ることが好きで、思いやりや共感性をもって接することを、また、自律性は、主体的に物事を判断し、困難に乗り越えていくことを表している。本研究では、小野寺・青木・古川 (1998) が、Grossmann et al. (1988) の定義に従って母親用に作成した親和性5項目 ($\alpha=.650$) と自律性5項目 ($\alpha=.760$) を用いた。

結 果

1. 障害受容の因子分析

ASD群を対象に障害受容の20項目の因子分析を行い (最尤法、Promax回転)、3因子を抽出した (Table 1)。第1因子は、子育てに喜びを感じ子どもを受容していることを表す「子どもの受容」、第2因子は、子どもについて社会に引け目を持っていることを表す「社会への引け目」、第3因子は、障

Table 1 障害受容項目の因子分析結果 (最尤法, Promax 回転)

	I	II	III	共通性
第Ⅰ因子 子どもの受容				
子育ての中に生きる喜びや充実感を味わっていると感じる	.922	-.004	-.188	.727
子育ては楽しいと感じる	.842	-.048	-.037	.719
子どもと一緒にいると気持ちがやすらぐ	.765	.152	.018	.518
子育てに希望がもてる	.756	-.125	-.186	.564
子どもと遊んでいて楽しいと思うことが多い	.708	-.078	.029	.577
自分自身の自己の成長を実感する	.642	.203	.222	.503
子どもを育てることが、負担に感じられる	-.639	.055	-.114	.526
子どもが確実に成長していると感じられる	.611	-.029	-.175	.318
子育てによって自分が成長していると感じられる	.566	.117	.301	.511
子育てに自信がもてる	.503	-.349	.145	.638
第Ⅱ因子 社会への引け目				
子どもを育てるのに周囲の目や言葉が気になる	.094	.793	-.209	.667
子どもを育てていくことに不安を感じる	-.076	.622	.014	.429
子どもを育てるには精神的な支えが必要である	.172	.576	.248	.315
子どものことで引け目や劣等感をもっている	-.187	.508	-.003	.378
私は親としてうまく対応できないと思うことがある	-.221	.490	-.130	.454
第Ⅲ因子 障害の受容				
障害児のための活動に積極的に加わっている	-.137	.289	.657	.406
子どもに障害があることを受け入れられる	.200	.082	.564	.436
人に子どもの障害について話ができる	.000	-.073	.563	.340
親戚にも子どもの障害のことを平気で言える	-.092	-.285	.511	.345
子どもは、自分の身体の一部のような気がする	-.175	-.273	.450	.244
因子間相関				
I		II	III	
II	-.439			
III	.465	-.209		

害を自分の中に受け入れて行動している状態を表す「障害の受容」と名付けた。第1因子と第2因子は、障害に対する言及はなく、一般の子育ての受容を表しているためASD群と定型発達群を対象とし（第1因子： $\alpha=.887$ 、第2因子 $\alpha=.703$ ）、第3因子は、ASD群のみを対象にした（ $\alpha=.660$ ）。これら3つの因子は、北原（1995）の定義に概ね対応している。

2. ASD群と定型発達群における各尺度の比較

すべての尺度について、ASD群と定型発達群の違いをt検定で調べたところ（Table 2）、支援ニーズ、親和性、自律性、育児不安、愛着行動、問主観

的把握、障害受容のいずれの尺度についても、ASD児の母親は定型発達児の母親と有意な違いがあることが示され、それぞれに対する支援の必要性が示された。

3. ASD群と定型発達群における支援ニーズ

ASD群と定型発達群ごとに、支援ニーズの4尺度と他の尺度とのPearson相関係数を求めた（Table 3）。弱い相関を示す相関係数0.3以上でかつ有意水準1%以上でみると、ASD群では、レスパイト支援ニーズが育児不安と正の相関、障害支援ニーズは、「社会への引け目」と正の相関があった。

Table 2 各尺度の平均値（標準偏差）とt検定結果

	ASD群	定型発達群	t値
	Mean (SD)	Mean (SD)	
心理的支援ニーズ	13.14 (3.37)	7.90 (2.68)	10.918 ***
情報支援ニーズ	10.32 (1.84)	8.10 (2.45)	7.655 ***
レスパイト支援ニーズ	15.00 (3.22)	12.89 (3.39)	4.264 ***
障害支援ニーズ	19.46 (2.75)		
親和性	13.38 (2.16)	14.54 (2.19)	-3.612 ***
自律性	12.57 (2.77)	13.56 (2.52)	-2.608 **
育児不安	23.04 (4.06)	19.75 (3.99)	5.560 ***
愛着行動	12.73 (3.48)	14.98 (2.68)	-4.551 ***
問主観的把握	13.89 (2.92)	15.72 (2.26)	-4.391 ***
子どもの受容	25.38 (4.57)	29.99 (3.60)	-8.239 ***
社会への引け目	15.25 (2.69)	12.11 (2.25)	9.094 ***
障害の受容	12.11 (2.67)		

p<.01, *p<.001.

Table 3 支援ニーズと各尺度の相関係数

		心理的支援 ニ ズ	情 報 支 援 ニ ズ	レスパイト 支援ニーズ	障 害 支 援 ニ ズ
ASD 群	親和性	.062	-.122	-.089	-.021
	自律性	-.198	-.190	-.169	-.241
	育児不安	.254	.212	.505 ***	.314 *
	愛着行動	-.008	-.077	.157	-.015
	問主観的把握	-.170	.034	.010	-.059
	子どもの受容	.015	.128	-.105	-.179
	社会への引け目	.278 *	.020	.280 *	.351 **
	障害の受容	-.022	.004	-.125	-.029
定 型 発 達 群	親和性	-.063	.119	.004	-
	自律性	-.231 **	-.162 **	-.090	-
	育児不安	.434 ***	.187 **	.385 ***	-
	愛着行動	.091	.070	-.012	-
	問主観的把握	-.240 ***	-.160 *	-.168 **	-
	子どもの受容	-.117	-.016	-.097	-
	社会への引け目	.464 ***	.297 ***	.282 ***	-

* p<.05, ** p<.01, *** p<.001.

一方、定型発達児群では、心理的支援ニーズは、育児不安と「社会への引け目」と正の相関、レスパイト支援ニーズは、育児不安と正の相関があった。ASD児の母親では、育児不安が高い場合にレスパイト支援を強く求めているのに対して、定型発達児の母親は、自分自身の心理的問題に対するカウンセリングなどの心理的支援も必要としていた。

4. ASD群と定型発達群の共分散構造分析

親の内的要因と親子の関係性の関連性として、親和性や自律性が、愛着行動、間主観的把握、育児不安を媒介して障害受容に影響を及ぼすことを考え、各尺度間のPearsonの単純相関分析 (Table 4) を行うとともに、愛着行動と間主観的把握を制御変数とした各尺度間の偏相関分析 (Table 5) と育児不安を制御変数とした各尺度間の偏相関分析 (Table 6) を行った。

ASD群における、親和性と「子どもの受容」との関係を見ると、両尺度間の単純相関係数は.410 ($p<.01$) であるが、愛着行動と間主観性把握を制御変数とした偏相関係数は.213 ($p=ns$) であったことから、親和性と「子どもの受容」との間に愛着行動や間主観的把握が媒介することが考えられる。次に、自律性と「子どもの受容」との関係を見ると、両尺度の単純相関係数は.437 ($p<.001$) であったが、育児不安を制御変数とした自律性と「子どもの受

容」の偏相関係数は.258 ($p=ns$) であることから、自尊心と「子どもの受容」との間に、育児不安が媒介することが考えられる。また、自律性と「社会への引け目」との間の単純相関係数は-.479 ($p<.001$) であり、育児不安を制御変数とした偏相関係数も-.354 ($p<.01$) と高い負の偏相関があったことから、自律性は育児不安を介さずに「社会への引け目」と関係していることが考えられる。

これらの結果から、Fig. 1のモデルを作成し、共分散構造分析を行ったところ、十分な適合性を得ることができた ($\chi^2(13)=14.139$, $p=.364$; CFI=.991, RMSEA=.04, AIC=76.139)。なお、親和性と「子どもの受容」との間の偏相関分析から、育児不安が両者を媒介することが考えられたので、Fig. 1のモデルに親和性から育児不安へのパスを加えたモデルを作成したが飽和となったため、Fig. 1のモデルを採用した。

次に、定型発達群のASD群との違いを比較するために、定型発達群を対象に、Fig. 1のモデルから「障害の受容」を削除した共分散構造分析を行ったところ、十分な適合性を得ることはできなかった ($\chi^2(9)=73.349$, $p<.001$; CFI=.833, RMSEA=.168, AIC=125.349)、新たなモデルを作成した。定型発達群では、親和性と「子どもの受容」の間の単純相関係数が.477 ($p<.001$) であり、愛着と間主観性を制御変数とした偏相関係数は.336 ($p<.001$)

Table 4 各尺度間の相関係数

		親和性	自律性	育児不安	愛着行動	間主観的把握	子どもの受容	社会への引け目
ASD群	自律性	.538 ***	-	-	-	-	-	-
	育児不安	-.432 ***	-.445 ***	-	-	-	-	-
	愛着行動	.274 *	.144	-.110	-	-	-	-
	間主観的把握	.438 ***	.363 **	-.306 *	.567 ***	-	-	-
	子どもの受容	.410 **	.437 ***	-.548 ***	.271 *	.591 ***	-	-
	社会への引け目	-.173	-.479 ***	.438 ***	-.189	-.411 **	-.431 **	-
	障害の受容	.242	.297 *	-.270 *	.011	.347 **	.316 *	-.232
定型発達群	自律性	.411 ***	-	-	-	-	-	-
	育児不安	-.202 **	-.224 **	-	-	-	-	-
	愛着行動	.123 *	.073	.063	-	-	-	-
	間主観的把握	.412 ***	.348 ***	-.325 ***	.301 ***	-	-	-
	子どもの受容	.477 ***	.307 ***	-.391 ***	.221 ***	.528 ***	-	-
	社会への引け目	-.120	-.305 ***	.504 ***	.040	-.338 ***	-.235 ***	-

* $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$.

Table 5 愛着行動と間主観的把握を制御変数とした各尺度間の偏相関係数

		自律性	育児不安	子どもの受容	社会への引け目	障害の受容
ASD 群	親和性	.456 ***	-.352 **	.213	.007	.121
	自律性	-	-.372 **	.290 *	-.386 **	.181
	育児不安	-	-	-.474 ***	.356 **	-.169
	子どもの受容	-	-	-	-.252	.126
	社会への引け目	-	-	-	-	-.092
定型発達群	親和性	.314 ***	-.081	.336 ***	.023	-
	自律性	-	-.121	.158 *	-.210 ***	-
	育児不安	-	-	-.292 ***	.427 ***	-
	子どもの受容	-	-	-	-.084	-

* p<.05, ** p<.01, *** p<.001.

Table 6 育児不安を制御変数とした各尺度間の偏相関係数

		自律性	愛着行動	間主観的把握	子どもの受容	社会への引け目	障害の受容
ASD 群	親和性	.428 **	.253	.356 **	.230	.020	.144
	自律性	-	.107	.266 *	.258	-.354 **	.205
	愛着行動	-	-	.564 ***	.254	-.158	-.042
	間主観的把握	-	-	-	.532 ***	-.324 *	.288 *
	子どもの受容	-	-	-	-	-.255	.208
	社会への引け目	-	-	-	-	-	-.132
定型発達群	親和性	.383 ***	.139 *	.374 ***	.441 ***	-.021	-
	自律性	-	.090	.299 ***	.244 **	-.229 ***	-
	愛着行動	-	-	.340 ***	.267 ***	.009	-
	間主観的把握	-	-	-	.460 ***	-.214 **	-
	子どもの受容	-	-	-	-	-.048	-

* p<.05, ** p<.01, *** p<.001.

と両者に大きな違いはなかったため、親和性は愛着と間主観性を媒介せずに「子どもの受容」と関係していることが考えられる。これらの結果を考慮して、Fig. 2 のモデルを作成し、共分散構造分析を行った

ところ一定の適合性を得ることができた ($\chi^2(4) = 7.519$, $p = .111$; CFI = .985, RMSEA = .059, AIC = 39.519)。

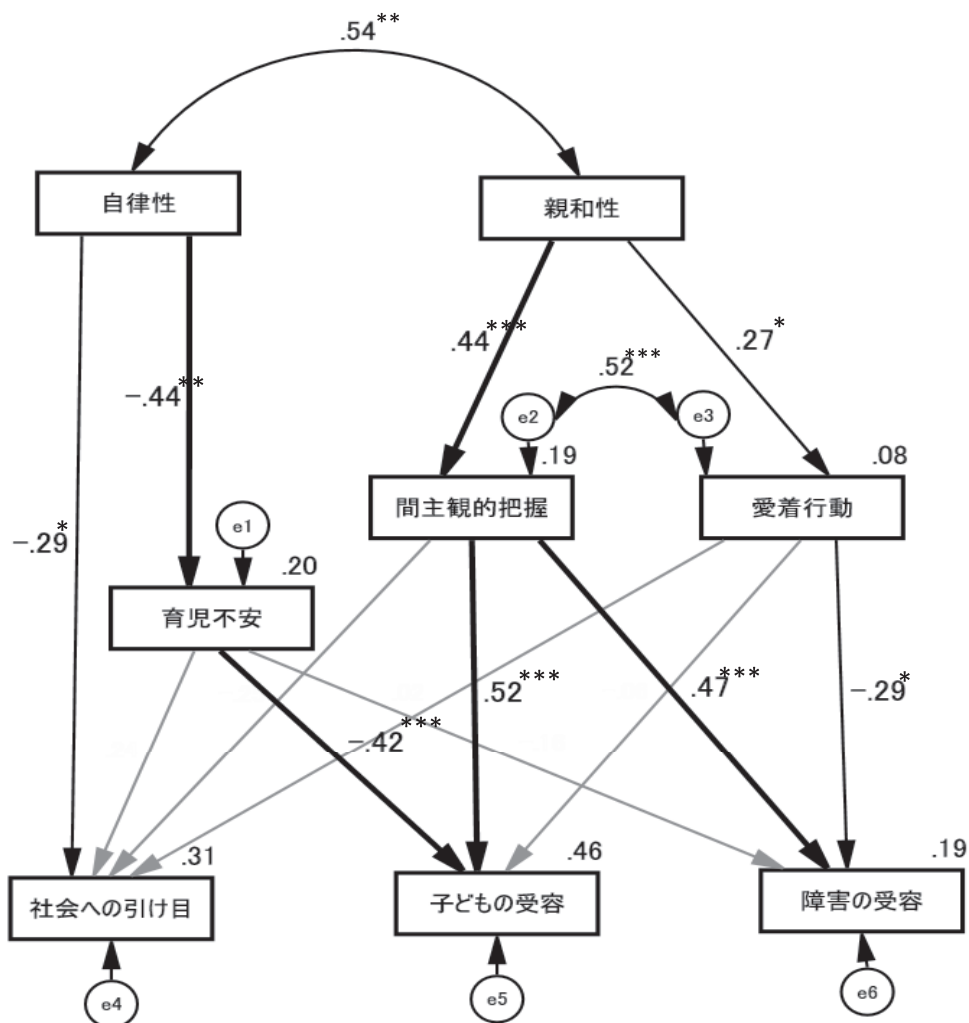


Fig. 1 ASD群の共分散構造分析の結果

* 黒線は有意なパスを表す. * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$.

考 察

定型発達では、親の関わりに対して子どもが情動的シグナルを交えて応答する親子相互作用によって、親は子どもと同じ気分や情動を共有し、子どもの気持ちを間主観的に感じ取ることができる。このような間主観的な交流ができないASD児の場合には、親もまた子どもの気持ちを間主観的に感じ取れないことが考えられる。ASD児の接近維持の愛着行動を「道具的安全基地」として親に関係を求めている状態と捉えると、親は、子どもが自分に接近してきても、子どもと気持ちが通じ合わず、情緒的絆を感

じられない状態であると推察される。

Sameroff, McDonough, and Rosenblum (2004)は、親子の相互交流において相互調整が困難になると悪循環が生じる交互作用プロセス (Transactional Process) のモデルを提唱している。ASD児が抱えている間主観性の問題を親子の交互作用プロセスから考えると、ASD児は社会的相互作用を通じた間主観性が生じにくいいため、母親も子どもの気持ちが分かりにくい。また母親は、子どもの気持ちが分からず、子どもとの情動共有がないと、相互交流をしようとするモチベーションが下がる。その結果、親子相互交流の頻度が少なくなる。親子相互交流が少

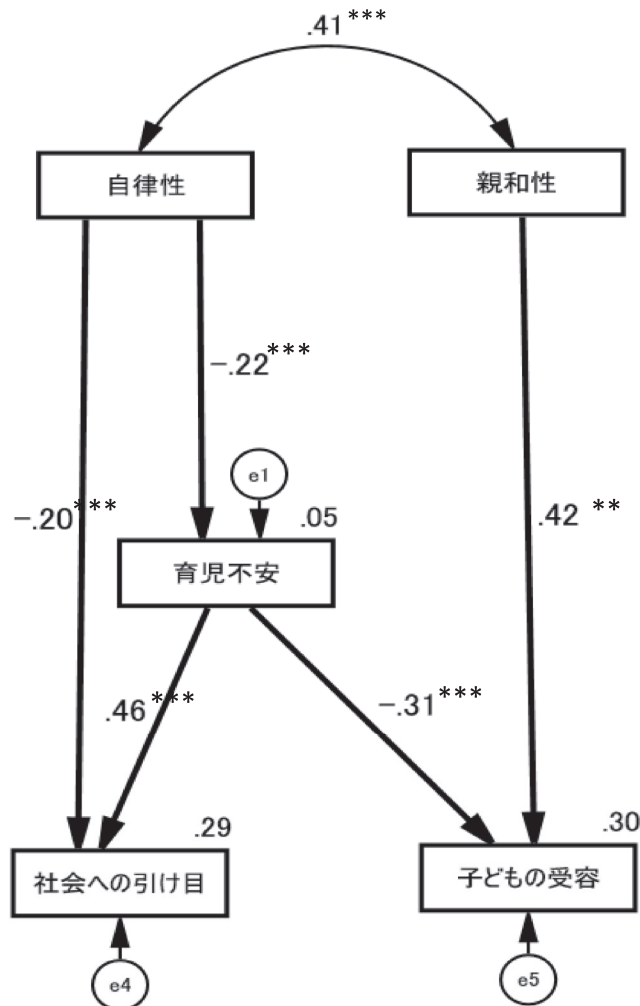


Fig. 2 定型発達群の共分散構造分析の結果

*黒線は有意なパスを表す. *** $p<.001$.

ないと子どもの間主観性の成立がさらに遅れるという悪循環に陥る。しかし、これは、ASDの親子支援の大きな手がかりになるだろう。つまり、親子の交互作用プロセスの悪循環を好循環に換えていけばいいのであり、親が能動的に共感性を持って働きかけていけば、子どもとの間主観性が高まる可能性が考えられるのである。

ASD群の共分散構造分析によって、母親の親和性が高いと間主観的の把握が高くなることが示された。親和性とは、子どもの面倒を見るのが好きで、子どもに共感する心性をもっていることを表している。また、親子の相互交流において、親が子どもを間主

観的に把握するということは、子どもにおいても間主観性が生じている可能性が考えられる。そのため、これらの結果は、親が子どもに対して能動的かつ共感的な関わりを行うことが、子どもの間主観性の育成に影響を与えることを示唆するものと考えられる。たとえ子どもの間主観性が育ってない場合でも、子どもへの共感性が高い母親は、Mind-Mindedness (Meins, 1997) や 洞察性 (Oppenheim & Koren-Karie, 2002) のように、子どもが間主観性を持っているがごとく、親が思い込みを持って子どもに能動的に関わっていることが想定される。篠原 (2013) は、Mind-Mindednessや洞察性の研究知見から、

親が子どもの意図、欲求、感情、思考の存在を想定しながら向き合うことは、子どもへの応答的で敏感なかかわりを促進し、それが子どもの愛着表象や他者理解に繋がると述べている。また、More Than Wordsプログラムでは、社会的相互作用が成立しないASD児にも、親が思い込みを持って交流していく関わり方が具体的に教えられる。これらは、ASD児の親子相互作用において、子どもに間主観性が育っていなくても親から共感的に働きかける重要性を示している。

さらに、親の間主観的把握が、障害受容に影響を与えていた。子どもの間主観性が育ち、親が子どもの気持ちが分かるようになると、子どもとの情緒的絆を感じるようになり、子どもが一層可愛く思えることが予想され、これが、子ども自体の受容だけでなく、障害の受容をも可能にすると思われる。一方、愛着行動は、子どもの受容との関係が示されないばかりか、障害の受容とは負の弱い関係が認められたことは、母親が子どもの障害を受容するには、接近維持行動としての愛着関係ではなく、子どもとの間主観的関係が成立することが大変重要であることを示唆するものである。社会的相互作用により促される社会的認知の構成要素として共同注意、間主観性、愛着表象、共感性、自己理解、心の理論などがあげられ(Sharp, Fonagy, & Goodyer, 2008)、最近では、これらが連関して発現する報告が相次いでなされている。別府(2001)は、行動レベルではなく心的支えを求める表象レベルの愛着が、他者理解の発達の基盤を築き、それにより共同注意が獲得されることを指摘している。定型発達では、社会的相互作用を重ねる中で愛着行動と愛着表象が連動して形成されるが、ASD児では、愛着行動を示しても、表象レベルの心の支えとして母親を求めないという問題が生じ、これが母親にとって子どもを受容する障壁になることが本研究から示唆された。

他方、自律性が高いと育児不安が低くなり、さらに育児不安が低いことが子どもの受容に影響を及ぼすことが示された。ASD児の母親の育児不安を軽減するには、母親の自律性を高める支援が有効であることが分かる。支援ニーズを調べると、育児不安が高いほど、レスパイト支援を求めている。ASD児を育てる際に、母親の日常活動に制限が加わることで、母親を疲弊させていることを考慮すると(柳澤, 2012)、母親は、子育てに忙殺されている日常から離れて、自己回復を図る時間や機会を求めていることが考えられる。このような場合、一般に、レ

スパイトケアや同じ境遇にある家族が相互に悩みを打ち明けて交流する家族支援が行われているが、ASD児の母親は定型発達の母親よりもかなり自律性が低くなっていることを考えると、今後は、自律した主体としての自己を回復し困難な状況に対応できるように、自律性をエンパワメントしていく支援が求められる。子どもの受容が、間主観的把握だけでなく、育児不安によっても影響を受けていたことは、子どもの受容は、間主観性を高め、育児不安の減らすという二通りの方略によって、より効果的に高められると言える。したがって、ASD児の親支援では、間主観だけでなく育児不安軽減への対応は欠かせないことが分かる。

定型発達児の母親に対する共分散構造分析では、愛着行動と間主観的把握が他の要因と関係しないことが、ASD児の母親との大きな違いであった。定型発達児では、意識的に親子相互作用を行わなくても、成長に伴って自然に間主観性が進行するため、親にとって間主観性は子育てにおける重要課題ではないことが考えられる。しかし、定型発達児でも愛着障害や関係性不全などの親子の関係性の問題は存在する。定型発達児の母親が、高い支援ニーズを持っていたように、カウンセリングなどの心理的支援によって自律性を高め、子どもの受容を向上させていくことが重要であろう。それに対して、ASD児との関係性を築くには、気持ちに寄り添った共感的働きかけ(石井, 1995; 小林・鯨岡, 2005)、共感関係の成立(伊藤, 1991)、情動共有経験(別府, 2001)が重要であることが指摘されている。本研究でも、能動的かつ共感的な関わりが、間主観性を高め、引いては障害受容を向上させることが示唆され、ASD児の社会的相互作用を促す親支援が有用であると考えられた。従来のASD児の親支援が、育児不安やストレス軽減という対処療法に留まる中で、一歩踏み込んだ支援の在り様への提言と捉えられよう。

現在提案されている発達の介入を行う親支援プログラムは、いずれも海外で開発されたものである。子育ては、親子を取り巻く文化環境によって大きな影響を受ける。また、ASD児の子育ては、子どもの発達特性、親の障害受容や育児不安などによって難しさが異なっており、それらを考慮した親支援の取り組みが必要である。本研究で得られた知見をもとに、我が国の子育て状況に合わせた親支援プログラムを開発していくことが今後の課題である。

引用文献

- 別府哲 (2001). 自閉症幼児の他者理解 ナカニシヤ出版.
- Buitelaar, J. K. (1995). Attachment and social withdrawal in autism: Hypotheses and findings. *Behaviour*, 132, 319-350.
- Capps, L., Sigman, M., & Mundy, P. (1994). Attachment security in children with autism. *Development and Psychopathology*, 6, 249-261.
- Carter, A., Messinger, D., Stone, W., Celimli, S., Nahmias, A., & Yoder, P. (2011). A randomized controlled trial of Hanen's "More Than Words" in toddlers with early autism. *The Journal of Child Psychology and Psychiatry*, 52(7), 741-752.
- 呉裁喜・岡田節子・朴千萬・中嶋和夫 (2005). 障害幼児の発達特性と母親のニーズの関係 大東文化大学紀要, 44, 15-22.
- Girolametto, L., Sussman, F., & Weitzman, E. (2007). Using case study methods to investigate the effects of interactive intervention for children with Autism Spectrum Disorders. *Journal of Communication Disorders*, 40, 470-492.
- Grossmann, F. K., Pollack, W. S., & Golding, E. (1988). Fathers and children: Predicting the quality and quantity of fathering. *Developmental Psychology*, 24, 82-91.
- 石井哲夫 (1995). 自閉症と受容的交流療法 中央法規出版.
- 小林隆児・鯨岡俊 (2005). 自閉症の関係発達臨床 日本評論社.
- 伊藤英夫 (1995). 自閉症児の母子関係の発達—Strange Situationとの関係から 早稲田心理学年報, 27, 47-57.
- 伊藤良子・近藤直美・木原久美子・松田景子 (1991). 母子の情動的交流遊びが自他意識とコミュニケーション活動に果たす役割：自閉的障害が疑われた幼児に対する集団指導での母子遊びを中心に 東京学芸大学特殊教育研究施設報告, 40, 95-103.
- 北原佑 (1995). 発達障害児家族の障害受容 総合リハビリテーション, 23, 657-663.
- 近藤清美 (1998). 父子関係の行動観察による評価 家庭教育研究所紀要, 21, 115-122.
- Lee, L. C., Harrington, R. A., Louie, B. B., & Newshaffer, C. J. (2008). Children with autism: Quality of life and parental concerns. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 38, 1147-1160.
- Meins, E. (1997). *Security of attachment and the social development of cognition*. East Sussex, England: Psychology Press.
- 牧野カツ子 (1985). 乳幼児をもつ母親の育児不安—父親の生活および意識との関連 家庭教育研究所紀要, 6, 11-24.
- 三木陽子 (1998). 障害児をもつ母親の「ふっきれ感」—ソーシャルサポートによる考察 性格心理学研究, 6, 150-151.
- 夏堀撰 (2001). 就学前期における自閉症児の母親の障害受容過程 特殊教育学研究, 39, 11-22.
- 小野寺敦子・青木紀久代・古川真弓 (1998). 父親になる意識の形成過程 発達心理学研究, 9, 121-130.
- 大井学 (2006). 高機能広汎性発達障害にともなう語用障害：特徴、背景、支援 コミュニケーション学, 23, 87-104.
- Oppenheim, D. & Koren-Karie, N. (2002). Mothers' insightfulness regarding their children's internal world: The capacity underlying secure child-mother relationships. *Infant Mental Health Journal*, 23, 593-605.
- 尾崎康子 (2005). 幼児期における自閉性症状に及ぼす母子支援の有効性—愛着と母子分離のプロセスからの検証 富山大学教育学部附属教育実践総合センター紀要, 6, 291-297.
- 尾崎康子・齋藤雅英・Toth, G. (2011). 発達障害幼児の親支援におけるアセスメントの予備的検討 相模女子大学紀要, 75C, 109-121.
- Prizant, B. M., Wetherby, A. M., Rubin, E., Laurent, A. C., & Rydell, P. J. (2006). *The SCERTS Model: A comprehensive educational approach for children with autism spectrum disorders, volume II: Program Planning and Intervention*. Baltimore, Maryland: Paul H. Brookes Publishing Co.
- Rogers, S. J., Ozonoff, S., & Maslin-Cole, C. (1991). A comparative study of attachment behavior in young children with autism or other psychiatric disorders. *Journal of the American Academy of Child and Adolescent Psychiatry*, 32, 1274-1282.

- 坂口美幸・別府哲 (2007). 就学前の自閉症児をもつ母親のストレスの構造 特殊教育学研究, 45, 127-136.
- 榊原久直 (2011). 自閉症児と特定の他者とのあいだにおける関係障碍の発達的変容: 相互主体的な関係の発達とその様相 発達心理学研究, 22, 75-86.
- Sameroff, A. J., McDonough, S., & Rosenblum, K. (2004). *Treating parent-infant relationship problems*. The Guilford Press, New York.
- Sharp, C., Fonagy, P., & Goodyer, I. (2008). *Social cognition and developmental psychopathology*. Oxford: Oxford University Press.
- Sigman, M., Dijamco, A., Gratier, M., & Rozga, A. (2004). Early detection of core deficits in autism. *Mental Retardation and Developmental Disabilities Research Reviews*, 10, 221-233.
- 篠原郁子 (2013). 心を紡ぐ—親による乳児の心の想像と心を理解する子どもの発達—ナカニシヤ出版.
- 白滝貞昭・柏木宏介・松川悦之 (1996). 自閉症ハイリスク児の乳幼児期特徴に関する研究—共同注視機能と母子愛着関係確立との関係—安田生命社会事業団 研究助成論文集, 32, 38-44.
- Sussman, F. (2012). *More Than Words 2nd Edition: A Parent's Guide to Building Interaction and Language Skills for Children with Autism Spectrum Disorder or Social Communication Difficulties*. Toronto: A Hanen Centre Publication.
- Trevarthen C. (1998). The concept and foundations of infant intersubjectivity. In S. Braton(Ed.), *Intersubjective Communication and Emotion in Early Ontogeny*. Cambridge: Cambridge University Press, pp15-46.
- Trevarthen, C., Aitken, K., Papoude, D., & Robarts, J. (1998). *Children with autism, 2nd edition: diagnosis and interventions to meet their needs*. London: Jessica Kingsley Publishers.
- 柳澤亜希子 (2012). 自閉症スペクトラム障害児・者の家族が抱える問題と支援の方向性 特殊教育研究, 50, 403-411.

付記

本調査にご協力頂きました幼稚園、保育所、療育機関の皆様、そして島田療育センターの小沢浩先生

に深く感謝申し上げます。

なお、本研究は、平成23年度科学研究費の助成を受けて行われました。